199　副甲状腺腫の検出における ^{99m}Tc-tetrofosminの有用性の検討

若松秀行（野口病院・放）野口志郎（同・外）陣之内正史、長町茂樹、二見繁美、田村正三（宮崎医大・放）

今回我々は、^{99m}Tc-tetrofosmin を用い、その副甲状腺腫の検出能についての評価を行った。

原発性および二次性副甲状腺機能亢進症と診断され、手術目的で当院に入院した10症例を対象とした。^{99m}Tc-tetrofosmin scintigram の画像所見を、ほぼ同時期に撮像した ^{201}Tl/^{99m}Tc subtruction scintigram、および頚部MRIと比較検討した。全例に手術が施行された。

^{99m}Tc-tetrofosminは、^{201}Tl/^{99m}Tc subtruction と同等の副甲状腺腫の検出能を得た。MRIは、非特異的な所見が多く、^{99m}Tc-tetrofosmin の所見を加味することが必要であった。^{99m}Tc-tetrofosmin の副甲状腺腫の診断トレーサーとしての有用性が示唆された。

200　^{99m}Tc-MIBI による二次性副甲状腺機能亢進症の副甲状腺過形成の検出

吉川啓一*、片桐　誠**、大塚信昭、曽根照喜、三村浩朗、柳元真一、友光達志、福永仁夫（国定病　外*、永寿総合病　外**、川崎医大　放）

人工透析中の二次性副甲状腺機能亢進症 17 例に ^{99m}Tc-MIBI delayed scan（投与後 2 時間目）を行った。全例副甲状腺剔出術が施行され、腫大副甲状腺の局在が確認された。その結果、右上副甲状腺過形成の検出率（23.5%）は、他部位（64.7～70.6%）よりも不良であった。なお、検出不能であった右上副甲状腺過形成の平均重量（231±106 mg）と平均最大長径（12.7±3.6 mm）は、他部位のそれらとほぼ同等であった。今回の検討より、二次性副甲状腺機能亢進症の局在診断において右上部に置する過形成は偽陰性を呈する頻度が高いことが示された。

201　Pre-Cushing症候群診断における副腎シンチグラフィーの有用性

熊野玲子、永松　仁、桑田　知、百瀬　満、小林秀樹、寺田慎一郎、金谷信一、牧　正子、日下部きよ子（東女医大　放）

副腎偶発腫の中には、無症候だが、コルチゾールの自律産生を認める症例があり、Pre-Cushing症候群として注目されている。今回、I-131Adosterol Scintigraphyによる Pre-Cushing症候群の検出能についての検討を行った。　対象は副腎偶発腫と診断され、副腎シンチグラフィー及び摂取率測定を施行した25例のうち追跡調査できた19例である。　デキサメサゾン抑制試験でPre-Cushing症候群が疑われたのは2例であったが、副腎シンチグラフィーにて患側副腎の集積が高値で健側が抑制されPre-Cushing症候群疑われたのは5例みられ、副腎機能評価における有用性が示唆された。

202　副腎皮質シンチグラフィで片側性描出を認めた副腎偶然腫：クッシング症候群との比較

谷　淳至、中別府良昭、土持進作、中條政敬（鹿大　放）

副腎皮質シンチグラフィ（以下、皮質シンチ）で腫瘍に一致する片側性描出を認めた副腎偶然腫の患者5名について内分泌的検索を行い、これら偶然腫症例と副腎腺腫によるクッシング症候群患者５名の皮質シンチとを比較した。　副腎偶然腫の患者の内分泌的検索では１名が正常範囲であったが、残りの４名では何らかの異常を認めた。皮質シンチの解析として、副腎部とバックグラウンドに関心領域を設定しピクセルあたりの平均カウントと最高カウントを求め、副腎部対バックグラウンド比を算出して比較したところ、両疾患群の間に有意差を認めた。　皮質シンチによる両疾患の鑑別の可能性が示唆された。

203　副腎偶発腫診断における I-123　MIBG シンチグラフィの役割

鈴木輝康、望月　守、伊藤生也、福井　淳、今井礼子＊井上達秀、榎本哲也、袴田康弘＊＊、坂田和之、吉田裕、森　典子＊＊＊、鈴木　誠†（静岡県立総合、核、＊放、＊＊内分泌内、＊＊＊循環器内、†病理）

副腎偶発腫として検出された褐色細胞腫の I-123 MIGB シンチグラフィによる鑑別診断上の問題点を検討した。対象は、初診時、副腎腫瘍の症状を伴わず、検診や消化器症状等で、超音波断層法、CT 等により偶然、副腎腫瘍が発見された６例である。褐色細胞腫の診断のために、全例 I-123　MIBG シンチグラフィを実施し、静注 24 時間後に撮像した。６例中、４例が病理組織的に褐色細胞腫と診断された。その無症状の褐色細胞腫は、I-123　MIBG の集積から無集積まで、多彩なシンチグラフィを示し、その鑑別診断に注意を要する。

204　交感神経系腫瘍に対する ^{123}I-MIBGシンチグラフィ　―― 治験第Ⅱ、Ⅲ相の使用経験 ――

堀池重治、石井勝己、中沢圭治、青木由紀、菊池　敬、神宮寺公二、太田幸利、依田一重（北里大　放）

交感神経系腫瘍に対する ^{123}I-MIBGの有用性について検討した。対象は16例で、計18回の検査を行った。16例中3例は小児例で年齢は7か月～10か月、男1例、女2例である。残りの13例は成人例で、年齢は25歳～73歳、男6例、女7例である。小児例は3例とも神経芽細胞腫の疑いで、全例腫瘍を描出できた。成人例13例はほとんど褐色細胞腫疑いであるが、5例に集積を認め、4例は腫瘍を確認しているが、1 例は未確認である。残り8例は集積を認めず、別の腫瘍と判明しているか臨床的に腫瘍の可能性は低いと考えられた。交感神経系腫瘍に対する ^{123}I-MIBGシンチグラフィは有用性が高く、画質も非常に良好であった。

Presented by Medical*Online